

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：34301

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K18596

研究課題名（和文）認知症患者との「関係性」についての新モデルの構築と展開 - 「主体」論を超えて

研究課題名（英文）The Development of a New Model of Relating to People with Dementia

研究代表者

翁 和美（OH, Kazumi）

大谷大学・真宗総合研究所・研究員

研究者番号：10780421

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000 円

研究成果の概要（和文）：これまでの認知症の介護（論）は主体を前提としている点で課題がある。日本にあるS施設（仮称）の調査から、研究代表者はその課題を乗り越える「相互了解世界」アプローチ（以下、「相互了解」）を見出した。医療の場に「日常生活世界」を接木してできる「相互了解」では患者がアパシーの状態にあっても専門家が「わかり合える」双方向的関係を築くことができる。ただし、「相互了解」は日本では評価されていない。本研究は、それが評価されるオランダの実践を参照に、国家戦略、福祉構造の布置、介護イデオロギーならびに施設が運営されている地域社会の生活圏のあり方から「相互了解」へと介護（論）を刷新する道筋を探る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高齢社会において喫緊の課題である介護の問題、とりわけ認知症患者とどのように向き合うのかについて「相互了解世界」という新しいアプローチを理論化し、その実践の可能性を提示した。それにより従来の介護（論）において独占的地位を占めてきた主体を前提とした介護（論）では捕捉できなかった専門家・患者像ならびにその両者のより良いつき合いを描き出すことに成功した。それは、起点に患者の自己や自我の表現を想定しなくとも（一方的「関係性」）、専門家が患者の受容や理解に向かい、「わかり合える」双方向的関係を築くことができるアプローチであり、医療社会学の知の地平を拡げ、同時に、専門家の実践としても貢献するものである。

研究成果の概要（英文）： Judging from my participant observation of S nursing home (tentative name), the XX-centered care need to be examined. I found S nursing home's 'commensurable' group-care practice having advantage over the XX-centered care. In the 'commensurable' group-care practice, western modernized medical space and the 'daily-life sphere' are bridged to create a new better association between the health care specialists and care-receivers (even the people with apathy in dementia). Since the 'commensurable' group-care practice is favorably evaluated not in Japan but in the Netherlands, this study, by comparing the cases of the two countries, attempts to pursue and envisage a concrete pathway from the XX-centered care to the 'commensurable' group-care practice in a broader socio-political context including nation-wide strategy, positioning of its welfare, ideology on care, and the way of community sphere in which the 'commensurable' group-care practice has been operated.

研究分野：医療社会学および文化社会学

キーワード：相互了解世界 日常生活世界 医療の場との接木

1．研究開始当初の背景

言うまでもなく、認知症患者は圧倒的コミュニケーション弱者として通常の社会的コミュニケーション回路から切断され他者化されてきた存在である。1970年代に入り、治療優先と集団管理的ケアの時代に入ってから、認知症患者は、専門家主体による一方的啓蒙と統制の客体であった。1980年代に入ってから、専門家批判の下、専門家主体に見直しが起き、1990年代に入ってから、それまで見過ごされてきた認知症患者に自律した主体を求める気運が生まれるようになった。折しも、高齢者層の増大が見込まれ始め、その医療費の抑制を要請するように、自己決定・責任論とも連動する患者主体論が認知症患者にも機械的に当てはめられた。

患者主体が謳われ、患者の自己や自我が追究されるとともに患者の受容や理解が専門家の倫理として強調される医療・看護・介護上の思考・施策・サービスは、「新しい介護」と呼ばれる。

「新しい介護」では、在宅をベースに地域包括支援センターから派遣される専門家が介護を支え、「重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができる」（厚生労働省「地域包括ケアシステム」公式サイト、https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/）地域包括ケアが目指されている。

ところが、「新しい介護」では、認知症患者に主体が見い出されたものの、暴言や暴力を振るう主体（患者）に対処・制止・防止する主体（専門家）が立ち上がる。自己決定・責任を期待することが困難なケースでは、専門家に過剰な負担を強い、結果的に専門家も患者も困難な状況におかれることがある。患者主体を謳いながら専門家主体である医療の場の矛盾により、「新しい介護」で目指された専門家と患者との協働もかえって難しくなっていることを指摘する研究も出始めていた。

2．研究の目的

高齢社会において介護の問題、とりわけ認知症患者とどのように向き合うのかは喫緊の課題である。これまでの認知症の介護（論）は主体を前提としている点で課題がある。研究代表者は、専門家主体（論）である認知症患者に対する従来の介護（論）も患者主体（論）である「新しい介護」（論）もいずれも主体を前提とする点において課題があることを指摘した上で、日本にあるS施設（仮称）の綿密な調査から、そうした課題を乗り越える専門家と患者の間の「相互了解世界」というまったく新しいアプローチ（以下、「相互了解」）を見い出した（『認知症患者と「わかり合える」という「相互了解世界」の創出：医療空間に接ぎ木された「日常生活世界」実践から』京都大学大学院文学研究科社会学博士論文、2013）。それは、起点に患者の自己や自我の表現を想定しなくとも（一方的「関係性」）専門家が患者の受容や理解に向かい、患者と「わかり合える」双方向的関係を築くことができるアプローチである。

ただし、研究代表者がそれを見い出した日本での実践は、その意義や有効性が十分に理解されていない。そこで、本研究では、主体論の本場でありながら「相互了解」が実践され評価され始めているオランダの実践を参照に、国家戦略、福祉構造の布置、介護イデオロギーならびに施設が運営されている地域社会の生活圏のあり方から主体論から「相互了解世界」へと介護モデルを刷新する道筋を探ることにした。

3．研究の方法

フィールド調査を（Ａ）国家戦略とその福祉構造の布置における解明と（Ｂ）介護イデオロギーと生活圏における解明の２つの調査系に分けて行なった。（Ａ）における福祉構造の布置とは国家戦略における福祉の位置づけのことを指す。（Ａ）の調査系では、オランダの認知症村（Hogeweyk、蘭語で Hogeweyk、以下、ホグウェイ）に対するフィールド調査と日本のＳ施設に対するフィールド調査を行なった。（Ｂ）の調査系では、施設の外に出て、ホグウェイとＳ施設がある地域を隈なく歩く社会踏査の手法を加えてフィールド調査を行なうと同時に、日本で「相互了解」の基盤となる医療の場に「日常生活世界」を接木する取り組みを始めた地域のフィールド調査を行なった。それぞれの調査では、適宜、文献収集も行なった。実施内容について説明を加えると以下ようになる。

本研究において参照軸となるホグウェイの考察については、創設者メンバーに対するインタビューやホグウェイにやって来る地域ボランティアに対するインタビューに加えて世界中のメディアや見学者に公開された情報や本研究と同時期に実施されているオランダの認知症ケアの調査報告書を含んでいる。

Ｓ施設については、離職者の離職理由から紐解くことに注視した。本研究は、研究目的に即せば、「相互了解」が始まった時期の社会背景とその成立要件を探るだけでなく、現在において、「相互了解」の実践がＳ施設においていかに継承され得るのかということを見ていくことも必要であるからである。「相互了解世界」へと介護モデルを刷新する道筋は、新規でＳ施設に入職する医療従事者や介護従事者が「相互了解」の実践を継承するのかもしれないのか、継承するとすればどのような条件下で起こるのか、という点にも見い出せるからである。

（Ａ）の調査系の２つのフィールド調査を進める中で、当初、「相互了解」を正当化するように作用した居宅介護との混同が、表層的に「相互了解」の具体的手法と「新しい介護」の混同をも招き、「相互了解」を「新しい介護」の一つという理解に押しとどめたことが確実になった。居宅介護との混同は、介護は家族介護が望ましいという規範や価値観ならびに地域包括ケア体制の反映であり、ここではこうした介護の規範や価値観ならびに地域包括ケア体制を集約する思想・思考を介護イデオロギーと総称する。後述するが、「相互了解」では、究極には、開放性の高い劇場的空間さえ生み出され、私的領域（プライベート）と公的領域（パブリック）の範囲の拡大と縮小が自在になり、公的領域が演出されれば施設内に社交の場が生まれる。そこで、介護イデオロギーが投影される私的領域と公的領域の総体的あり様をホグウェイがあるオランダ社会とＳ施設がある日本社会それぞれで探ると同時に、ホグウェイとＳ施設が運営されている地域でその生活圏を見極め、そこで見い出せる社交の場のあり様を探った。

日本で「相互了解」の基盤となる医療の場に「日常生活世界」を接木する取り組みを始めた地域のフィールド調査については、自宅で認知症と診断されたパートナーと暮らしているＡさんに調査協力者兼地域コーディネーターとなっただき、研究代表者がフィールド調査を行なうことできない時期の主要な動きについて記録をとっていただいている。ホグウェイもＳ施設も確立された実践であるため、本研究の目的に即せば、「相互了解」の基盤となる取り組みの立ち上げに関わる人びとがどのような困難に直面し、どのような条件が満たされれば集団実践として確立されていくのかを明らかにする必要がある。地域全体を対象とする本フィールド調査では、取り組み実現のための費用を捻出するための行政との交渉術、反対者を含んだ地域住民との折衝ならびに取り組み実現のために立ちあがった準備組織における地域住民と専門家の関係が主要な注目点として浮かび上がってきている。

4. 研究成果

(A)の調査系については、すでに2つの成果物として論文にまとめ図書の一部として刊行されている。それが、「医療の場の「日常生活世界」アプローチと拡張型劇中劇」(松田素二他編『日常実践の社会人間学 - 都市・抵抗・共同性』山代印刷株式会社出版部、2021年3月、pp261~pp274)と「「出会う」老人の性とセクシュアリティ」(松田素二とゆかいな仲間たち編著『雑草たちの奇妙な声 - 現場ってなんだ?!』風響社、2021年3月、pp273~pp296)である。

先に書いたように、(A)の調査系の2つのフィールド調査を進める中で、「相互了解」の正当な評価を阻んでいるのが介護イデオロギーの作用であり、表層的に「相互了解」の具体的手法と「新しい介護」の混同をも招いていることが確認された。

家族介護を基礎に据える「新しい介護」と「相互了解」は表層的には類似しているようでまったく異なるアプローチである。このことを明らかにするために、「相互了解」が正しく機能すれば、個別の主体を凌駕する未来志向の開放性の高い劇場的空間さえ成立し得ることを立証した。「相互了解」の基盤となる医療の場と「日常生活世界」を接木する試みは、主体を攪乱したとしても個別性を圧迫しない。上記の2つの論文ではそれが「相互了解」の機能として生じ得ることを明らかにした。

とりわけ、「「出会う」老人の性とセクシュアリティ」の論文では、認知症患者の他者化が際立つ性とセクシュアリティをあつかい、高齢者においてさえ押しつけられる他者化基準(「枯れた」「老いるの恋」)が、居宅介護でメインとなる家族介護を非常に困難な状況に陥れる一方で、「相互了解」では回避可能な状況が作られ得ることを考察した。

(B)の調査系は、いずれのフィールド調査も継続中であるため、ここでは、今後の検討課題を示唆するにとどめたい。

ホグウェイとS施設は、公式の手法において共通しているものの、オランダでは国民に対しては尊厳死が承認され、国家が「重篤な」認知症患者を認定しホグウェイに割り当てている(この点については、裏付けができていない)点で、最深部では異なる理解と評価を得るに至っている。こうしてオランダと日本では、「重篤な」認知症患者の位置づけも看取りを含めた「重篤な」認知症患者をめぐる介護のあり方も異なっている。

ところで、(B)の調査系の社会踏査では、ホグウェイとS施設がある地域は、国内の他地域と比べて著しく社交の場が多く、「相互了解」に参画する人は、私的領域の充足と同時に公的領域の充足にも関心が高い人が多いという点で共通点があることがわかった。

一方、日本で「相互了解」の基盤となる医療の場に「日常生活世界」を接木する取り組みを始めた地域のフィールド調査では、医療の場と「日常生活世界」を接木する取り組みの推進派には医療または専門家に対する苦い経験や不信感があり、それが取り組み実現の推進力になっていることが見て取れた。医師と手を携えて実践した経験こそがS施設の取り組みやその継承を可能にしているが、明らかにそれとは違うあり方が見えてきた。S施設の場合、認知症患者を「病气」の存在として固定し、その行動の抑制を志向する医療的視座に対抗する言説を作り上げる正統性は、医師と手を携えて実践した経験により成員に与えられる。こうして「相互了解」の舞台が整うのである。それに対して、医療または専門家に対する苦い経験や不信感は、医療の場に「日常生活世界」を接木する取り組みを始める十分な動機になり得、発足に際しては、必ずしも専門家主導により成立する必要がない実践である可能性が出てきた。ただし、本取り組みは実現に向けてまだ道半ばであり、さらなる調査が必要である。

(B)の調査系のいずれの調査からも、開始以前には想定していなかった成果が得られた。そ

れは、「相互了解」の初期段階の専門家による一方的「関係性」においては、「患者」・「認知症患者」といった他者化に作用するある種の類型化が行なわれているのではないか、という批判があるが、それが妥当ではないということが明らかになるという成果である。「相互了解」において作用するもう一つの「日常生活者」類型は、誰しもが持つ「日常生活者」の側面に基づき地続きに入びとがつながる資源となり得るだけでなく、「相互了解」を生み出した地域の生活圏においては、その地域文化を構成する要素がある部分は重なる一方である部分は異なることで、個性を担保しつつ一枚岩的類型化を回避した、言わば、不完全な類型化であることが明らかになった。(B)の調査系の医療の場に「日常生活世界」を接木する取り組みを始めた地域の生活圏においてもこの特徴があり、本研究の目的である主体論から「相互了解世界」へと介護モデルを刷新する道筋を探る上で非常に重要な調査になっていくことが期待できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 朝田佳尚 / 阿部利洋 / 井口暁 / 井戸聡 / 翁和美 / 大野哲也 / 川田耕 / 北島義和 / 倉島哲 / 佐々木祐 / 田原 範子 / 近森高明 / 中村昇平 / 鍋倉聡 / 西村大志 / 野村明宏 / 濱西栄司 / 福浦一男 / 松浦雄介 / 松田素二 / 右田裕規 / 森田次朗 / 安井大輔 / 山本めゆ / 李洪章	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山代印刷株式会社出版部	5. 総ページ数 372
3. 書名 日常実践の社会人間学 - 都市・抵抗・共同性	

1. 著者名 Amrit Vajracharya / 磯部卓三 / 伊地知紀子 / 梅屋潔 / Ellam Odinga / 翁和美 / 川西健登 / 川西史子 / 木原 弘恵 / 金泰泳 / 久保智 / Gladis Maresi / 坂井紀公子 / 高誠晩 / 高見守 / 田多井俊喜 / 谷合佳代子 / 田原 範子 / 土屋雄一郎 / 戸梶民夫 / 仲尾友貴恵 / 中川大 - / Benard Opudo / 松居和子 / 松田素二 / Moniwill Ambiche / 森田次朗 / 彌重桃子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 466
3. 書名 雑草たちの奇妙な声：現場ってなんだ？！	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------